

1. 懐良親王と九州

(1) 懐良親王の九州下向

懐良親王は 1329 (元徳元) 年に後醍醐天皇の第 8 皇子として誕生した。「懐良」の読みは『国史大辞典』では「かねよし」と立項されているが解説文で『かねなが』とも読まれる」と補足されている。ちなみに「懐」について三条公忠の日記『後愚昧記』応安 7 年 (1374) 2 月 11 日条に出てくる「藤原懐国」には「やすくに」と振り仮名がつけられている。

後醍醐天皇は 1336 (建武 3 年) 12 月に大和国吉野に自ら主宰する朝廷 (南朝) を開いたことは前回述べた。しかしその 2 年後に北畠顕家と新田義貞が戦死したため南朝は劣勢に立たされた。これを挽回すべく後醍醐天皇は同年 9 月に自らの皇子を日本各地に派遣した。第 4 皇子宗良親王が遠江、懐良親王が九州へというふうである。

後醍醐天皇は懐良を九州に派遣するにあたり肥後の阿蘇惟時に綸旨を宛てた。その内容は南朝軍の不振の理由は軍に一致団結を欠いたためで、官軍を進め軍陣を整えるために懐良を征西大將軍として九州に派遣するのでその援助を惟時に要請するということだった。

懐良に随従したのは 12 名だったことが『忽那家文書』所収の「忽那一族軍忠次第」から分かる。そのうちの筆頭が五条頼元だった。頼元は儒家の清原家に生まれ、当初は光厳上皇院政下において訴訟機関である文殿の職員だったが待遇に不満があったのか南朝に転じている。

懐良は九州までの中継地として讃岐、伊予に滞在しており、その間の 1339 (延元 4) 年に後醍醐は崩御し第 7 皇子義良親王が後村上天皇として即位した。懐良は九州に上陸しようとしたが幕府方勢力が強い北部九州への上陸を諦め、豊後水道・日向灘を南下し南薩摩に上陸し 1342 (興国 3) 年 6 月谷山城に入った。

(2) 九州における北朝方

一方の北朝方の状況をみていくと建武 3 年の多々良浜の戦いで官方を破った足利尊氏は 4 月少弐頼尚や宇都宮冬綱、大友氏泰らを率いて博多を出発したが九州における官方への押さえとして足利一門の一色範氏や仁木義長、小俣氏連らを残した。義長はのち上洛したため範氏が初代の鎮西管領 (のち九州探題) となった。

幕府方の優勢により九州各地の守護の相次ぐ帰国を知った範氏は 8 回も幕府に帰洛を申し出たがその度に幕府は拒否した。これに戸惑った範氏は 1340 (暦応 3) 年 2 月幕府に嘆願状を提出した。そこには九州で活動するには経済基盤が

ぜい弱なこと、守護との間で軍勢指揮権の棲み分けがなされていないこと、そして自身の拠点がないことが述べられている。改善されたのは1346（貞和2）年になってからだった。拠点については博多に設定し大隅国肝付郡を新たな領地とした。さらに範氏の息子や一門を九州に派遣した。そのうち範氏をよく補佐したのが子の直氏だった。直氏は九州下向と同時に肥前・筑後守護に任じられたことで鎮西管領の軍事基盤となった。

さてここで薩摩に目を向けると、薩摩国守護職を有するのは島津貞久だった。貞久は鎮西探題の滅亡の功績により日向国守護職と大隅国守護職を回復した。建武2年に尊氏が建武政権に叛旗を翻すと貞久は尊氏討伐軍における東山道侍大将となったが敗れてしまう。貞久の弟時久は箱根・竹之下の戦いで足利方として奮戦し日向国新納院を宛がわれた。そして12月に貞久は日向国守護職を没収されその代わり大友氏泰に与えられた。

貞久は日向国守護職を取り戻すためか翌年1月の尊氏による京都奪還戦では尊氏方として参戦し、3月の多々良浜の戦いでも尊氏方として奮戦した。翌月尊氏より宮方の肝付兼重らの討伐のため分国への下向を命じられ、同時期に日向国大将として下向した畠山直顕と連携して宮方を攻撃した。その間に畿内への派兵を命じられると庶長子川上頼久と従兄弟伊作宗久を派遣した。しかし1337

（延元2）年に公家三条泰季が薩摩に上陸すると宮方の動きが活発化し、さらに貞久は嫡男宗久とともに上洛、畿内を転戦しており薩摩国内は手薄となった。その隙を狙って延元4年6月に宮方が貞久の居城碓山城を攻撃した。このときは守護代酒匂久景が撃退したが、翌年1月に嫡男宗久を失った貞久は3月に薩摩への帰国を許され8月以降宮方の拠点制圧に専念する。1341（暦応4）年4月には肝付兼重らが籠る東福寺城を、閏4月に矢上高純の居城催馬楽（せばる）城を攻略した。そして翌年懐良親王が薩摩に上陸したのである。

懐良は1348（正平3）年1月14日、肥後の御船城に入り、2月、菊池武光に擁立され菊池城に入った。

畿内では1月5日、河内国四条畷で楠木正行が高師直に敗れ戦死、師直軍はその勢いで南朝の本拠吉野行宮を焼き討ちし、後村上天皇以下は大和国賀名生に逃亡している。

そして師直と足利直義の対立から観応の擾乱が始まったのである。

2. 観応の擾乱と足利直冬

（1）足利直冬の前半生

ここで尊氏の子直冬についてみていくと、直冬の生没年についての確証はなく『系図纂要』所収の「足利将軍家系図」では1400（応永7）年3月11日に74歳で没したとある。これに従えば1327（嘉暦2）年の生まれで尊氏が23歳

の時の子だった。直冬は成長すると鎌倉の東勝寺の喝食となっており、鎌倉幕府滅亡の際に東勝寺で北条一門が自害する場面をおそらく目撃したかもしれない。そして父尊氏が幕府を開いたことを聞くと尊氏との対面を果たしたいと思い、東勝寺の僧円林に伴われ上洛し人を介し対面を求めたが尊氏はそれを許さなかったため、仕方なく玄慧（げんえ）法印の下で勉強しながら詫び住まいをしていた。玄慧が直冬を直義に紹介すると直義は直冬に見どころがあるなら自分が兄尊氏に伝えようと答えたが、尊氏は何年たっても直冬との対面を許さなかった。そこで直義は直冬を養子に迎えたのである。

直冬の初陣は紀伊で蜂起した南朝方の討伐だった。このとき直義は尊氏に討伐軍の大將に直冬を推挙した。すると尊氏も直冬に父子の名乗りを許さざるを得なくなった。そして1348（貞和4）年4月、直冬は従四位下左兵衛佐に任じられ、5月28日に出陣、途中東寺に宿泊したのち6月18日に進発した。8月8日に合戦となり多くの犠牲を出しながらも各地を転戦し9月28日に南朝方を撃破した直冬は帰洛した。しかし尊氏は直冬の初陣の成功を心中では苦々しく思い、尊氏の正室登子や義詮、高師直、仁木義長、細川顕氏も冷ややかだった。この周囲の態度に直義は直冬を京から離れさせたほうが良いと考え、尊氏もそれに賛同し、長門探題として下向させることとした。

しかし直冬は下向する前に高師直・師泰兄弟の排除が先決と考え備後国鞆にとどまり勢力の拡大に努めた。これは命令違反となり尊氏・師直から直義と結託して謀反を企んでいると疑惑をもたれるようになった。

貞和5年閏6月、直義は上杉重能・畠山直宗らと師直の暗殺を企てたが失敗した。すると今度は尊氏に迫り師直を執事から解任させることに成功した。しかし8月、師直は大軍を率いて直義邸を包囲したため直義は尊氏邸に逃げ込んだ。そして師直は尊氏に直義の引退と上杉重能・畠山直宗の流罪を要求し実現させた。直義の後任には関東地方を統治していた義詮が上京して就任し、その代わりとして尊氏の4男基氏が関東へ下向した。この基氏をもって鎌倉公方の初代とされ、その補佐（関東執事（のち関東管領））として尊氏の母方の従兄弟にあたる上杉憲顕と高師冬（師直の従兄弟）が就任した。師直は執事に復帰し、重能と直宗は配流先の越前国で処刑された。また師直は備後国の武士に命じて直冬の宿所を襲撃させ、直冬は九州へ落ち延びた。そして直義は上京した義詮に自邸を追い出され、12月に出家に追い込まれた。

（2）観応の擾乱の発生

肥後国河尻津に上陸した直冬は周辺の国人を味方に引き入れることに成功した。貞和6年（改元して観応元年）10月28日、尊氏は直冬討伐のため出陣しようとした。しかしその2日前の26日、直義が京を脱出し、11月21日、畠山国清の居城・河内石川城に入り23日、南朝に降伏した。それに呼応するように

讃岐守護細川頼氏や伊勢守護石塔頼房、越中守護桃井直常など直義派の武将が挙兵し京へ進軍し、直義も畠山国清に擁され山城国八幡まで進出した。

尊氏・師直は備前国福岡まで進軍し直冬討伐軍を募ろうとしたが上記の情勢を見て直冬討伐を諦め反転した。桃井直常が京に迫ってきたことで義詮は京の防衛を断念し尊氏・師直軍に合流しかろうじて桃井軍に勝利したが、直義方に寝返るものが跡を絶たなかったため尊氏軍は播磨国書写山に退いて再起を図り、翌2年2月17・18日、両軍は摂津国打出浜で激突、尊氏は惨敗し高師直・師泰を出家させることを条件に直義と和睦した。2月26日、一行が武庫川鷲林寺の前を通りかかったとき待ち伏せしていた上杉修理亮（重能の実子重季か）の軍勢に襲撃され師直・師夏父子と師泰・師世父子、師兼（師直の従兄弟）、師景（師直の甥）、師幸（師直の従兄弟）ら高一族ら7名が殺害された。

（3）分裂する九州

さて九州に目を戻すと、直冬が肥後に上陸したことで九州は南朝方・直冬方・鎮西管領方に分裂した。範氏・直氏父子と九州の守護は当初は協力関係にあった。たとえば少弐頼尚（筑前・豊前・肥後守護）は直冬方の河尻幸俊・詫摩宗直討伐のため肥後に出陣するなどしているが、直冬の九州上陸後に直冬方となった。これにより劣勢となった範氏父子は観応元年10月、長門へ転進することになり、尊氏の下向を期待したが観応の擾乱の発生によりその支援もままならないことを知ると豊前に次男範光、肥前に嫡男直氏を派遣することで反直冬方勢力の結集を図った。また大友氏泰や島津貞久も鎮西管領方として奮戦した。

尊氏と直義が和睦すると直義は尊氏に直冬を鎮西管領に任じるよう要求し、尊氏はしぶしぶ認め観応2年3月、直冬は鎮西管領となった。

（4）擾乱の終結

直義は観応2年2月5日から南朝との講和交渉を開始している。その論点は皇位継承問題・幕府の存続問題・所領問題の3つだった。まず皇位継承問題について、直義は両統迭立を主張したが南朝は後村上天皇の皇統への一本化を主張して対立してしまう。北朝において貞和3年10月に光明天皇の譲位により甥の興仁が崇光天皇として即位した際、後醍醐天皇の甥にあたる邦省が皇太子に立候補したが直義は光厳上皇の実子直仁を皇太子とした。

次に幕府の存続問題について直義は存続を主張したが南朝は足利氏が奪った天下を南朝に返還したうえで考えると回答した。そして所領問題について南朝は武士の本領安堵を保証したが直義は南朝方が各地の所領を侵略していると批判した。このように講和交渉は決裂してしまい、南朝の講和派である楠木正儀は南朝の態度に激怒し幕府方に寝返って吉野を攻め落とすと直義に申し出たという。

観応2年6月、直冬が幕府に帰順し正式に鎮西管領となった。

7月28日、尊氏が佐々木導誉討伐のため近江へ、29日、義詮は赤松則祐討伐のため播磨へ出陣した。しかしそれは直義を東西から挟撃するための口実であり直義は越前・信濃を経て鎌倉へ逃亡した。

11月3日、足利義詮が南朝と講和した。このとき南朝がだした条件は元弘一統の時代への回帰と直義の追討だった。尊氏はこの条件に内心不満だったが南朝と講和した。7日、崇光天皇と皇太子直仁は廃され、元号は南朝の「正平」に統一された。これを「正平一統」といい、12月23日には南朝に神器を押収された。

12月27日、尊氏軍と直義軍は駿河国薩埵（さった）峠で激突し緒戦の結果、尊氏軍が勝利したことで翌年1月5日に直義は尊氏に降伏し鎌倉浄妙寺境内の延福寺に幽閉されたのち2月26日に急死した。毒殺されたというのが通説だがこれは『太平記』にしか記載されていない。新説として急性の肝臓がんというのがある。これは直義が40歳のときに生まれた実子の如意丸が早世したことや身内との望まない戦争に加え幽閉先で失意による酒に逃げたことなどといった肉体的・精神的からきたものという。

3. 足利直冬の没落と相次ぐ鎮西管領の交代

（1）足利直冬の没落

観応2年8月、直冬は筑後凶徒退治のため今川直貞を派遣し、直貞は9月28日、筑前金隈・月隈の戦いで一色範光（範氏次男）を破った。さらに直冬与党の少式頼尚が29日の筑後床河で一色範氏を破ると、範氏は豊後日田に逃れた。

同3年11月12日、直冬は筑前椿・忠隈で範氏と戦ったが敗れ、18日に大宰府に帰還した。24日、一色氏冬らが頼尚の居城の筑前浦城を攻撃。このとき直冬は参加したのかは不明だが、頼尚は菊池武光の援軍を得て一色軍を撃退したものの、直冬は長門豊田城に転進した。

（2）北朝の復活

さて畿内では、正平7年閏2月19日、後村上天皇は山城国八幡へ移ったが、このとき光厳・光明・崇光ら3上皇と直仁親王を連行し、5月11日に足利義詮が八幡を攻略すると6月2日、後村上らは大和国賀名生へ移った。すると京ですべての朝儀が中止されただけでなく、未だ旧直義勢力が跋扈するなかで天皇対天皇という対立構造の必要性を感じた幕府は3日、義詮の意を受けた佐々木導誉が北朝の重臣の勸修寺経頭に光厳上皇の第2皇子弥仁王の踐祚と光厳上皇の母西園寺寧子の執政を申し入れた。寧子は要請を蹴ったが度重なる説得にしぶしぶ引き受け、25日、二条良基が関白となり、8月17日、弥仁王は元服のち後光厳天皇として踐祚した。このときの方法は廷臣に擁立されて即位した古代の継体天皇の先例が用いられた。三種の神器を南朝に押収されたままの踐祚

に不安を隠せない後光厳に良基は「天照大神を鏡に、尊氏を剣に、不肖良基を璽と思召せ」と進言したという。

(3) 混迷する九州

観応3年2月2日、一色範氏と菊池武光・少弐頼尚連合軍は筑前針摺原で激突し、範氏は大敗してしまう。

9月27日、後光厳天皇の踐祚の代始により文和へ改元されたが、直冬は観応を使用し続けた。しかし10月30日をもって使用をやめて無年号文書を発給している。それは直冬が長門に転進したのち尊氏に降伏しようとした。そのとき配下の手前「文和」を使用するわけにはいかず、反意がないことを示すために「観応」や「正平」を使用するわけにもいかないために無年号を選択したのである。しかし降伏は許されずやむなく正平8年5月、南朝に降伏した。

正平9年5月、直冬が上洛を開始したため、尊氏や義詮は京を明け渡してしまう。

(4) 征西府の全盛期到来

尊氏は直冬を撃退したがこの状況のため九州に下向することができず、範氏・直氏父子はさらに苦境に立たされる。同10年11月、大友氏が征西府方に降伏してしまったため父子は九州から撤退した。直氏は尊氏の怒りを買ったことで1358(延文3)年に再び九州へ下向したが4月に尊氏が死去、さらに筑前麻生山の戦いで菊池氏に敗れ京へ逃亡した。

これにより九州北部は南朝方となり、残すは南九州のみとなった。島津貞久は日向の畠山直顕に対抗するために南朝に降伏し菊池武光が日向へ出陣し直顕は抵抗するものの敗れ没落した。この間に大友氏時が幕府方に復帰し、正平13年12月懐良親王は豊後へ侵攻、翌年3月、再び豊後へ侵攻し高崎山城を包囲した。

すると今まで鎮西管領と敵対していた少弐頼尚が幕府方となって、豊前糸田城に陣し、志賀氏房・阿蘇惟村と連絡をとり武光を包囲しようとした。武光・懐良親王は高崎山城の包囲を解き肥後へ帰国した。

7月、頼尚は筑後国味坂荘、武光らは高良山・柳坂・耳納山に陣を張った。19日、武光が筑後川を渡ると少弐軍は戦わず大保原まで退いた。しばらく小康状態が続いたが、8月6日菊池軍が仕掛けて激戦となった。これが九州三大合戦のひとつ、筑後川の戦い(大保原合戦)の始まりである。この戦いで頼尚の子直資が戦死しただけでなく懐良親王と武光が負傷するという元寇を上回る被害をもたらした。

畠山直顕の脅威が去ったことで島津氏は再び幕府方となった。そこで正平16年5月、懐良・武光は日向へ侵攻したが、九州北部で少弐氏の動きが活発化したため再び肥後へ帰国した。7月、少弐頼国(直資の子)が筑前加布利城を攻略

すると、武光は筑前長鳥山に陣を敷いた。筑前細峯城・飯盛城で合戦となり、少弐勢は油山へ追い詰められ、8月菊池軍の総攻撃により少弐軍は撤退した。これにより懐良・武光らは大宰府に入部し、征西府の全盛期が始まるのである。

(5) 相次ぐ鎮西管領の交代

幕府は一色氏に代わり1361(康安元)年、斯波氏経を鎮西管領として派遣した。氏経は高経の次男として生まれた。高経は暦応元年閏7月の藤島の戦いで新田義貞を討ち取る功をあげるなど猛将として知られた。氏経は10月九州に下向したが探題館のある大宰府は南朝方に占拠されていたため豊後の大友氏時を頼り高崎山城に籠って南朝方に対抗しようとした。さらに少弐冬資(頼尚の子)も大友氏を頼って豊後に逼塞していた。この状況に武光は大友氏を叩くことが肝要と考え、弟武義を征西府の守将とし自らは豊前・豊後方面へ出陣した。その隙に氏経は子松王丸を総大将とし大宰府を攻撃させた。武義は負傷しながらもよく防ぎ、武光も豊前から救援に駆けつけ筑前国長者原にて探題軍を撃破した。敗戦の報を聞いた氏経は周防にまで退いた。

続いて鎮西管領に任命されたのは渋川義行だった。この任命には伯母で足利義詮の正室である幸子の意向が働いた。しかし義行は征西府の頑強な抵抗に遭い九州に入ることができず、1370(建徳元)年に探題職を更迭された。

この間の1367(貞治6)年12月7日、将軍義詮が死去し、30日、子義満が将軍となった。義満は九州平定のため名将今川貞世(了俊)を派遣したがその話は次回に譲る。